



# 万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
〒228-8520  
神奈川県相模原市麻溝台2の1の1 北里大学東病院  
TEL: 042-748-9111 FAX: 042-745-5582  
発行者：比企能樹  
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大  
総合医療センター外科）  
E-mail: 03nmura@saitama-med.ac.jp  
印刷：株式会社 dig TEL: 03-3551-3060  
年2回発行 1995年4月創刊

## 支部長挨拶

### 万国外科学会ニュース

万国外科学会  
日本支部長  
比企 能樹  
(北里大学東病院長)



2年に一度の万国外科学会が、今年はウイーンで8月15日から20日まで開催されます。数えて本会は第38回目を迎えることになりました。

思えば1924年、この年はあのシーボルトの日本上陸から100年目ですが、初めてわが国からの会員を12名万国外科学会に輩出しました。正しくシーボルトの蒔いた近代医学の種が蓄を持ったと言うことであります。そして現在日本の本会員の数は、実に250余名を数え、今昔の感を新たにしております。

言うまでも無く今年の会議が行われるウイーンは、偉大なる外科医テオドール・ビルロートの本拠地であります。その証拠に彼の銅像は、生きているごとく今もウイーン大学構内に建っています。

音楽と芸術の街は、医学においてもまた世界に誇る伝統の都市であります。今を去る1881年1月29日、ビルロートは8人の子持ちの女性を手術しました。助手にミクリッヒを従え、世にも名高い術式、B-I法の手術を行ったという記録があります。そしてこの標本も、ウイーンの医学博物館において実際に見ることが出来ます。隣にはBozziniのLichtleiterも見ることが出来る内視鏡博物館も、オープンしたと聞きました。因みに博物館の在り処はJosphinna Wässinger Strasseです。

このように研鑽の場であった街での本会議は、自ずと活気を帯び、素晴らしい会になると期待が寄せられるのであります。

この機会に、ベテランから若手の会員諸侯が是非ご参加下さい、国際舞台に向かって羽ばたいて頂きたいものと切なる願いを抱いております。各国から数多くの参加者が見こまれておりますが、指折りの会員数を誇るわが国からも、内容豊かな研究発表を多くして下さい。特に若手の皆さん、華々しく国際舞台において日ごろの研究の成果を発表し、大いに議論を重ねて、次世紀により一層日本の医学の発展の礎と成って頂きたいのであります。

## 主な掲載内容

### ●支部長挨拶

### ●特別寄稿

林 四郎 先生  
鍋谷欣市 先生  
白日高歩 先生

### ●日本支部役員一覧

## 万国外科学会 第6回日本支部会 総会議事録

1998年11月11日（水）午前7:30～8:30  
於 リーガロイヤルホテル広島 3階 安芸の間

1. 比企能樹日本支部会会長挨拶
2. 出月康夫前万国外科学会会長挨拶
3. 第38回万国外科学会（1999年、ウイーン）の紹介
4. 庶務報告
  - 1) 会員移動状況（1998年11月現在）  
総会会員数 278名  
新入会数 19名
  - 2) 会費納入状況 164名（納入率 59.2%）
5. 広報委員会報告
6. 各担当幹事報告  
高見博教授より国際内分泌外科学会の報告  
愛甲孝教授より国際胃癌学会の報告  
北島政樹教授より日本ハンガリー外科学会の報告
7. 石川浩一名誉教授を名誉会員に推薦した。
8. 本学会の15年以上継続会員はスイス本部に文書にてその旨を申請することにより年会費が免除されることが報告された。
9. 出月康夫教授よりISS/SIC Foundationへの寄付金の依頼があった。この寄付金は開発途上国のドクターの本学会への参加を助成するものである。本学会の開催地について2001年はベルギー、ブリュッセル、2003年はタイ、バンコク、2005年は南アフリカ、ダーバンの予定であると報告された。
10. 山川達郎教授の閉会の挨拶  
(出席者・順不同・敬称略)  
嶋尾仁 酒井滋 金田悟良 松本純夫 比企能樹 大谷吉秀 山川達郎 中尾昭公 高見博 野口志郎 前田耕太郎 冲永功太 阿部令彦 出月康夫 土屋涼一 山岡義生 宮島伸宜 今村正之 砂川正勝 佐藤信昭 丸野要 長谷貴将 丸田守人 木下博明 石川正昭 斎藤和好 白杵尚志 小林国男 青山法夫 金澤暁太郎 村上卓夫 平山廉三 愛甲孝 曽我淳 馬場正三 北野正剛 草野満夫 北島政樹 幕内博康 林四郎 秋丸琥甫 白日高歩 田尻孝 本橋久彦

### 万国外科学会（ISS）への入会者促進について

最近、100年の歴史を持つ本会では若い外科医の新入会を広く呼びかけています。もし、先生が会員でなければ、この機会に入会の手続きをお考えなさればどうでしょうか。また既に会員であれば先生方の周囲には海外での学会活動に関心のある外科医がきっと大勢いらっしゃると思います。そういう先生方に是非入会をお勧めください。

### 万国外科学会正会員の特典

- 1 万国外科学会の公式英文誌 World Journal of Surgeryが毎号配布されます。
- 2 2年に1回行なわれるISS主催のInternational Surgical Weekに参加する登録料金が非会員より安くなっています。
- 3 Surgical Weekの案内や日程が早く入手できます。
- 4 万国外科学会ニュースレターおよび日本支部ニュースが定期的に配布されます。

日本支部は現在アメリカに次いで会員数が多く（現在280名）ISSの運営にも重要な位置を占めています。近い将来Surgical Weekの日本招聘も討議されています。年会費は120ドル（本部）と5千円（日本支部）になっています。入会金はありません。入会希望の先生がいらっしゃれば日本支部事務局宛にご一報ください。

### 日本支部事務局

〒228 神奈川県相模原市麻溝台2-1-1 北里大学東病院外科内

万国外科学会日本支部（支部長 比企能樹）

担当 嶋尾仁

Tel:042-784-9111 FAX:042-745-5582

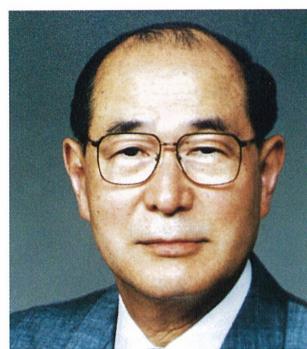
E-Mail:03nmura@saitama-med.ac.jp（広報担当 村田宣夫）

## 特別寄稿

### 「万国外科学会」とともに 思い出される人々

信州大学名誉教授

林 四郎



これまで末席を汚させていたゞいてきた内外の各種学会にはそれぞれ忘れられないような思い出があり、何かの機会について、つい昨日のように眼前に浮び上ってくるものが多い。1960年代から日本外科学会の評議員会に出席させていたゞいてきたが、評議員会の終り頃になると、毎回高名な教授方による御発言があり、今でもはっきりと耳の奥に残っている。外科に関連した国際的な学会、国際会議などに関した新しい情報がそれぞれ指導的な立場におられた教授方から紹介され、何とか参加したいものと刺激されたものであった。American College of Surgery, International College of Surgeonsなどとともに、Société Internationale de Chirurgieにも関する報告が続いたが、S.I.C.の情報を述べられる日本医大の斎藤漠教授の御聲がとくに印象的であった。あの斎藤教授の御報告ではSociété Internationale de Chirurgieという本来の学会名よりも獨得なニュアンスをもった「万国外科学会」という日本名が妙に記憶に残るものであった。「万国……」といった名称は「大阪万国博」などで耳馴れたものであるが、明治時代から数度にわたり誘致を試みてきた歴史がそのような印象を支えたのかも知れない。とにかく学会名としては「国際……」が一般的であるのに「万国外科学会」と何となく浮世離れ？した名称が印象的であった。

しかしこの「万国外科学会」を本当に身近かに感じるようになったのは1977年9月に京都市の「京都会館」で斎藤教授が主宰された27th Congress, Kyoto Congressであり、本学会で始めて口頭発表する機会が与えられた喜びを忘れられない。このKyoto Congressではそれまでに親交を深めていたGöteborg, SwedenのProf. L.E. Gelin, Copenhagen DenmarkのDr. H.E. Jensen, Mannheim, GermanyのProf. M. Trede, Chicago, U.S.A.のProf. L.M. Nyhus方と再会し、楽しくも有意義な数日を過ごすことができた。Parietal cell vagotomyなどで接觸を続けていたAarhus, DenmarkのProf. E. Amdrupはこの会には見えなかつたが、彼の共同研究者のDr. Jensen夫妻をこのCongressの後、当時在任した松本の地に迎え、数日を過してもらったが、この年の異常な残暑にいささか悲鳴をあげていた夫妻に「松本では涼しい毎日」と約束していたのに、実際には松本でも例年なく暑い9月で、すっかり失望させたことも「万国外科学会」の思い出の一つとして、今でも忘れない。またこのKyoto Congressに参加されたProf. Gelinは1967年にSIC Prizeを受け、チャーリーの愛称が有名な教授であったが、「Extracorporeal surgery for renal problems」の題名で講演された内容は当時、文字通り先端的なSurgery on the tableに関するものであるばかりでなく、以前に直接SangerenskaのGoteborg大学病院の手術室や教授室で見聞した話題であるだけに、極めて印象的であった。その後もVisiting ProfessorとしてProf. GelinやProf. Amdrupを彼らの大学に訪れるたびに、ヨーロッパの外科医がS.I.C.に深い関心を寄せ、「ヨーロッパの外科は1つ」といった、今日の欧州連合の到来を予感させるものがあつた。しかしこのように思い出深い北欧の親友、Prof. Gelinも、また最近ではProf. Amdrupも他界されたことを思うと、淋しい限りであり、あらためて敬弔の意を表したい。

これらのヨーロッパの友人から入会をすすめながら、つい手続をとる機会を後送りにしてしまい、active memberとして入会させていたゞいたのは斎藤教授や石川浩一教授方の御口添もあった1984年であった。それ以来active memberの1人として大してお役にも立てず、たゞ馬齢を重ねただけであるが、ISS/SIC「万国外科学会」ことを考えるたびに、多数の親交深い旧友を思い出す今日である。

## 特別寄稿

### 国際学会での発表能力を 高める為には

福岡大学第二外科教授

白日 高歩



昨年秋、韓国で開催された呼吸器疾患に対する日韓合同シンポジウムで、日本側シンポジストの一員として講演する機会を与えられた。元々英会話に自信のない私であるが、データーについては十分頭に叩き込んでいるので、30分程度の講演は適当に済ませられるだろうと、いわばたかをくくっていた。およそ20年前にトロントに留学した際にも適当に留学期間を終えられた経験から、以後英語発表力を高める努力を怠ったままとなっている。従って国際学会での発表は常に前もって準備した英文原稿の棒読みで済ましてしまうことが多かつた。ソウルでもそのつもりであったが、会場の雰囲気を見て直前にその考えを捨てた。日本側シンポジストの多くが原稿の棒読みに終始するのに比して、韓国シンポジストの先生方は原稿読みの人は少なく、どの人もスライドを見てボイジャーで説明し、時に聴衆に顔を向けて熱心にしゃべるといったスタイルであった。私の講演直前になってそれをみならう事として、持っていた原稿はすべててしまった。まずい英語を聞いていた聴衆の方々には申し訳なく、発表直後に幾つかの質問をいただいたが、私の発表内容、表現力を十分に評価してくれたか否か不明のままである。しかし一般に私を含めて多くの我が国研究者が国際学会で原稿を離れてのスピーチ、ディスカッションに極めて不得手なのは事実であり、このままでいいとは思えない。今日、我が国の研究者が国際学会に多数の演題を提出し、大挙して学会に出席しながら、いざ討論となるとつんばさじきにおかれる光景をよく見かける。そして我が国発表者のスライドは細かなデーター、数字の羅列でしかも英文原稿は難しい表現の連續となりがちである。論文に書かれるべき英語表現をそのままスピーチに持ってきて早口で読み上げるものだから、聴衆も同じ様にスピードで質問をし返してくる。その結果、壇上で立ち往生という事になり、時に会場からの失笑を買う事もある。

今回の日韓合同シンポジウムの体験から韓国の若手医師の英語能力は大変高いものを感じた。確かにイントネーション、スピードは我々と同じであっても、質問の内容、自分の主張の真意を確実に相手に伝えようとする意志と工夫があるように思った。私は昭和42年の卒業組であるが、我々よりも若い世代の先生方は、我々以上に国際学会での発表、討論に慣れておられるように思ってきた。現に今日、日常的に繰り返される国内学会での外人特別講演では、若い先生方の自信にあふれた質問風景を見て、さすがとしばしば関心させられたものである。しかしどもそれは必ずしも普遍的とはいえないようである。

最近つとに不安なのは、より若い世代、つまり最近の医学生の英語離れであり、これは私の大学だけの現象なのかと首をひねりたくなる。医学部4年、5年生でベットサイド教育が始まるが、臨床教育の現場では医学英語が彼等に全く通じない。自分の大学の恥をさらす事になるが、回診、カンファレンス、カルテ等に出現する疾患名、臓器名、手術法、検査法などで英語で表現されているものに全く対応できない状況である。近隣他大学の先生方にその事を聞いてみると、程度の差はある同じような現況との返事を得た。医学部に入学する程度の優秀な人材であるのに、6年間の最も大切な間に英語への関心がゼロに近くなっている。もちろん卒業してすぐに必死に取り組むものだから、抄読会、英文ペーパー作成には何かと対応出来るようになるのだが、英語での表現や理解力は低レベルのままである。学生達の持っている教科書を見ると、大手出版社発行の類型化した医学書ばかりで（私も時に執筆者の1人として名前を連ねるので大きな事は言えないのですが）、その内容のみしか覚えようとしていない。英語に対する関心は全くといってよい程うすく、何故かと問うと、目前の国家試験に無縁だからとの決まった返答である。学生の英語離れの元凶は、日本の医師国家試験にあるのであり、このような形の国試が続く限り、若い世代の英語離れはやむを得ぬ現実として続くであろう。当の私自身が医師国家試験の出題委員として、ここ数年協力させていただいているが、以前から日本の国試のせめて1割でも英語問題に切り替える試みをやってみたらよいのにときりに考える。会話の能力は高められないにしても、今以上の医学英語に取り組む姿勢はでてくるように思うのだが……。若い世代の医師が他国医師と同じ程度の発表能力を身につけて国際学会に臨んでもらう為にも、一考してほしい事柄である。

### 新会員の御紹介（1998年8月以後）

医師名	病院名
上西紀夫	東京大学医学部附属病院分院外科
小畠 满	中野総合病院外科
幕内雅敏	東京大学医学部第2外科
土田嘉昭	群馬県立小児医療センター院長
三浦敏夫	
横山利光	福井医科大学救急部
中川隆雄	福井医科大学救急部
須賀弘泰	福井医科大学救急部
桜井洋一	藤田保健衛生大学船曳外科
桑野博幸	群馬大学医学部第1外科

## 特別寄稿

### ナイアガラ滝の思い出

—第33回世界大会、1989年トロントの前に—

杏林大学名誉教授

鍋谷欣市



学会では学問研究を発表するのは当然であるが、国際学会ではそれ以外に未知の国の風景や情緒に触れることができて、人生を豊かにしてくれるのが嬉しい。不幸にも私は1989年のトロントにおける第33回万国外科学会まで、あまりにも有名なナイアガラ滝を見たことがなかった。南米のイグアス滝は、3回訪れて、世界一といわれるスケールの雄大さに圧倒されたが、雨季と乾季で水量の異なることなど、や、粗野の趣さえあった。果たしてナイアガラはどうかと、私はひそかにその優美さを期待していた。

たまたま、この年の夏から秋にかけて、8月29日から9月3日までアムステルダムにおいてInternational Gastro-Surgical Club (IGSC) があり、9月3日から8日までシカゴでInternational Society for Diseases of the Esophagus (ISDE) の第4回世界大会が開催された。シカゴでは、次の会長に指命されるなど忙しい週日であったが、9月9日にシカゴを出発してからは、ほぼ世界一周の長旅の中休みとなるナイアガラ滝の観光であった。

ナイアガラに到着したのが夕方のため、Skyline Foxheadに一泊する。翌朝は雲一つない快晴であった。ご存知のごとくナイアガラ滝には、アメリカ滙とカナダ滙があって、いろんな角度からの眺望を楽しめる。たしかに、アメリカ滙は岩石が多く男性的であり、カナダ滙のほうが美しいが、やはり二つの滙を含めた全貌の眺めがすばらしい。滙の広さはイグアス滙に劣るかも知れないが、特にカナダ

滙の滙壺から一陣の雲を醸し出して天空に舞い上っていく姿は、イグアス滙にはなかった美しさであった。最初は滙の美しさに圧倒されていたが、レストランでコーヒーブレイクのとき、滙を正面から眺められる席がとれたので、持ち合わせのボールペンで食卓の紙ナプキンにスケッチした。

このあと、遊覧船に乗ってアメリカ滙からカナダ滙の水しぶきを受けるところまで近付いてみた。間近にみる滙の迫力はすさまじく、遠くから眺めるより何とも滙が高いことか。船を降りてから、河原のところでスケッチブックに、今度はサインペンでもう一度スケッチを挑戦してみた。距離が近いせいか、滙の勢いが紙に響いてくるのを覚えた。変らないように見える滙の形も、よくみると強弱があって、二度と同じ滙のしぶきはないのかも知れない。

滙の裏へ廻って滙壺を間近に眺めると、轟音に声は聞きとれない。室内が映画ナイアガラを急に思い出して、マリリン・モンローとジョセフ・コットンがロマンを囁いたのではないかと盛んに懐かしがった。最後に展望台に登ってみると、滙の後方に実に広い水域があって、人々とした流れがやがて集まって、一気に瀑布となっている。何故か上空には、滙から昇る雲と遊ぶように鳥が飽かずに舞っていた。



### 万国外科学会日本支部 会員名簿 正誤表1999

(昨年12月に配布した会員名簿の訂正が必要な方は日本支部事務局までご連絡ください。)

氏名	ページ	訂正個所	誤	正
1 許斐康熙	5	郵便番号	〒800-0291	〒800-0296
2 青木克憲	1	所属等	浜松医科大学 救急部 〒431-3192 浜松 市半田町3600 電話：053-435-2796	慶應義塾大学病院 救急部 〒160-8582 新宿区信濃町35 電話：03-3353-1211(2245)
3 岩間毅夫	2	所属等	東京医科歯科大学 第2 外科 〒113-8519 文京区湯島1-5-45 電話：03-3813-6111	佐々木研究所附属杏雲 堂病院外科 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8 電話：03-3292-2051
5 白井良夫	6	電話番号	025-223-6161 (2564)	025-227-2228
6 高木 弘	7	所属	外科	院長
7 久次武晴	10	住所変更	〒849-8501 佐賀市鍋島5-1-1 佐賀医科大学病院 電話：0-52-31-6511	〒814-0006 福岡市早良区百未知 1-33-3 電話：092-843-6087
8 藤野幸夫	11	所属等	2935 Irving Street San Francisco, CA, 94122 U.S.A 1999.4.1より	埼玉医科大学 総合医療センター外科 〒350-8550 川越市鴨田辻道町1981 電話：0492-28-3620

多価・酵素阻害剤

指定医薬品、要指示医薬品<sup>(注)</sup>

**ミラクリッド®注射液**

健保適用

<sup>(注)</sup>注意一覧書類の方でなく  
指示により使用すること

**MIRACLID Inj.** (一般名:ウリナスタチン) 25,000/50,000/100,000単位

**【警告】**  
本剤の投与は緊急時に十分対応できる医療施設において、患者の状態を観察しながら行うこと。

**【禁忌 (次の患者には投与しないこと)】**  
ウリナスタチン製剤に対し過敏症の既往歴のある患者

**【効能・効果】 【用法・用量】**

効能・効果	用法・用量
急性胰炎(外傷性、術後及びERCP後の急性胰炎を含む) 慢性再発性胰炎の急性増悪期	通常、成人には初期投与量として1回25,000~50,000単位を500mLの輸液で希釈し、1回当たり1~2時間かけて1日1~3回点滴静注する。以後は症状の消退に応じ減量する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。
急性循環不全(出血性ショック、細菌性ショック、外傷性ショック、熱傷性ショック)	通常、成人には1回100,000単位を500mLの輸液で希釈し、1回当たり1~2時間かけて1日1~3回点滴静注するか、又は、1回100,000単位を1日1~3回緩徐に静注する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。

**【資料請求先】**  
持田製薬株式会社  
東京都新宿区四谷1丁目7番地  
電話(03)3358-7211(代) 〒160-851

※詳細は添付文書をご参照下さい。

**選ばれたFU系、究めればPyNPase**

**PyNPase**:フルツロンを5-FUに変換する酵素、ヒリミジンヌクレオシドホスホリラーゼの略号。

**【警告】**  
抗ウイルス剤ソリブジンとフルオロウラシル系薬剤との併用により、重篤な血液障害が発現し死亡に至った例も報告されているので、併用を行わないこと。(「相互作用」の項参照)

**【禁忌 (次の患者には投与しないこと)】**  
(1)本剤の成分に対し重篤な過敏症の既往歴のある患者  
(2)ソリブジンを投与中の患者(「相互作用」の項参照)

**【効能・効果】** 胃癌、結腸・直腸癌、乳癌、子宮頸癌、膀胱癌  
**【用法・用量】** 通常、1日量としてドキシフルリジン800~1200mgを3~4回に分けて経口投与する。  
なお、年齢、症状により適宜増減する。

**【使用上の注意】**  
1.慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)  
(1)骨髄機能抑制が増強するおそれがある。[2]肝障害又は腎障害のある患者[副作用が強くあらわれるおそれがある。][3]感染症を合併している患者[骨髄機能抑制により、感染症が悪化するおそれがある。][4]心筋梗塞又はその既往歴のある患者[症状が悪化するおそれがある。][5]消化管潰瘍又は出血のある患者[症状が悪化するおそれがある。][6]水痘患者[致死的な全身潰瘍があらわれるおそれがある。]  
2.重要な基本的注意  
(1)骨髄機能抑制等の重篤な副作用が起こることがあるので、定期的に投与初期は頻回に臨床検査(血液検査、肝機能検査等)を行うこと。患者の状態を十分に観察すること。異常が認められた場合には減量、休業等の適切な処置を行うこと。  
(2)重篤な感染症等により脱水症状があらわれた場合には補液等の適切な処置を行うこと。  
(3)感染症、出血傾向の発現又は悪化に十分注意すること。  
(4)小児に投与する場合には副作用の発現に特に注意し、慎重に投与すること。  
(5)小児及び生育可能な年齢の患者に投与する必要がある場合には、性腺に対する影響を考慮すること。  
3.相互作用  
(1)併用禁忌(併用しないこと)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ソリブジン (ユースビリ)	フルオロウラシル系薬剤との併用により、重篤な血液障害が発現し、死亡に至った例も報告されている。	フルオロウラシルの代謝が阻害され、血中濃度が上昇する。

(2)併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
他の抗悪性腫瘍剤	血液障害、消化管障害等の副作用が増強することがあるので、患者の状態を十分に観察すること。異常が認められた場合には減量、休業等の適切な処置を行うこと。	副作用が相互に増強される。

\* フェニトイド  
めまい、眼振、運動失調等のフェニトイド中毒があらわれることがある。

**薬剤基準収載**

**選ばれたFU系**

**フルツロン®**

Furtulon® 5-DFUR  
●(イ) フルツロンカセル100・カセル200

(資料請求先)

**日本ロシュ株式会社**  
〒105-8532 東京都港区芝2-6-1  
Nippon Roche Homepage Address:<http://www.nipponroche.co.jp/>

## 万国外科学会 日本支部会則

### 1. 万国外科学会日本支部会則

#### 第1章（名称）

本会は万国外科学会（International Society of Surgery [ISS] /Societe International de Chirurgie [SIC]）の日本支部会（Japan Chapter, 以下本会）と称する。

#### 第2章（目的）

本会はISS本部の事業を円滑に、かつ効果的にとり行うために、日本支部会会員が協力し合うことを目的とする。

#### 第3章（会員）

1. 正会員 万国外科学会で承認された正会員（Active member）は本会の正会員になる。

2. 特別会員 万国外科学会で承認された特別会員（Senior member）は本会の特別会員になる。

3. 名誉会員 万国外科学会で承認された名誉会員（Honorary member）及び日本支部会に特に功績があり日本支部総会で承認を得た会員は日本支部の名誉会員になる。

#### 第4章（役員）

##### 第1条 種類と任務

本会には会長1名、事務局長1名、常任幹事若干名、幹事50名以内、監事2名をおく。

会長が本会を代表し、総会、幹事会を召集し、これらを総括する。

役員の任期は2年とするが、再任は妨げない。

#### 第5章（会費）

##### 第1条 納付と会計報告

正会員は所定の年会費を納める。

本会の会計年度は1月1日より12月31日までとする。

#### 第6章（総会）

##### 第1条 規定

本会は年1回以上開催し、会長がこれを召集する。

#### 第7章（規定の変更）

##### 第1条

本規定の変更は幹事会で決定し、総会でその承認を得る。

付則 1 本規定は1997年4月9日より実施する。

2 正会員の年会費は5000円とする。

## 万国外科学会 日本支部役員名簿

医師名	病院名	役職
比企 能樹	北里大学東病院	日本代表
出月 康夫	埼玉医科大学総合医療センター	前会長
山川 達郎	帝京大学医学部附属溝口病院	事務局長
馬場 正三	浜松医科大学	監事
田中 雅夫	九州大学医学部	監事
青木 照明	東京慈恵会医科大学	幹事
石田 清	埼玉医科大学	幹事
今村 正之	京都大学医学部附属病院	常任幹事
沖永 功太	帝京大学医学部	幹事
小原 孝男	東京女子医科大学	幹事
恩田 昌彦	日本医科大学	幹事
川原田嘉文	三重大学医学部	幹事
北島 政樹	慶應義塾大学医学部	常任幹事
北野 正剛	大分医科大学	幹事
小林 国男	帝京大学医学部	常任幹事
斎藤 和好	岩手医科大学	幹事
佐竹 克介	大阪市立大学医学部	常任幹事
佐藤 紀	埼玉医科大学総合医療センター	幹事
嶋尾 仁	北里大学東病院	常任幹事
白日 高歩	福岡大学医学部付属病院	常任幹事
曾我 淳	新潟大学医療技術短期大学部	幹事
高木 弘	名古屋大学医学部	幹事
高橋 俊雄	京都府立医科大学	幹事
高見 博	帝京大学医学部	常任幹事
田尻 孝	日本医科大学	幹事
中尾 昭公	名古屋大学医学部	幹事
中川原儀三	市立敦賀病院	幹事
平山 廉三	埼玉医科大学	幹事
磨伊 正義	金沢大学がん研究所付属病院	幹事
松野 正紀	東北大学医学部	幹事
松本 由朗	山梨医科大学	幹事
村田 宣夫	埼玉医科大学総合医療センター	常任幹事
門田 守人	大阪大学医学部	幹事
山岡 義生	京都大学	幹事
酒井 滋	帝京大学医学部附属溝口病院	幹事

（所属を変更された先生は日本支部事務局までご連絡ください）

#### 編集後記

あと2年弱で20世紀が終わる。そこでマスコミでは世纪末という言葉があちこちで聞かれる。西洋伝来の脅威に日本人が大騒ぎすることもないと思うが、ここ数年日本でいろんな面で変化が表れている。時代の変わり目に合わせるかのように種々のものが変化している。そこで「世纪末」という言葉が流行るのだろう。医学に関しては近年すなわちこの20世紀末に急速な進歩があった。今から100年ほども経つと人々は20世紀末を医学あるいは生命科学の進歩の時代と呼ぶのかもしれない。

## プロトンポンプ・インヒビター

### 指定医薬品

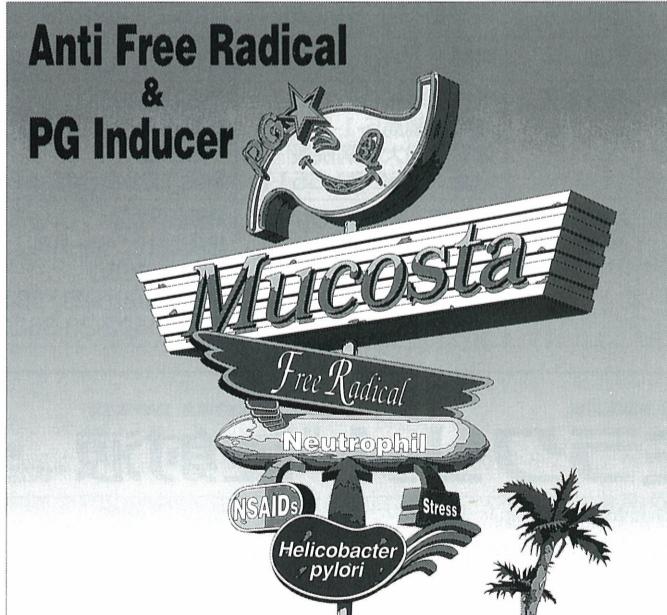
**タケpron®**  
カプセル15・30  
(ランソプラゾールカプセル)

■効能・効果、用法・用量、  
禁忌・使用上の注意および取扱い上  
の注意等については、添付文書を  
ご参照ください。

### ■薬価基準：収載

**Takepron®**

（資料請求先）  
**武田薬品工業株式会社**  
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号  
(9809)



#### ムコスターの特徴

1. 胃粘膜のPG増加作用・フリーラジカル抑制作用を併せ持つ初めての胃炎・胃潰瘍治療剤です。(±-カット-off vitro)

2. NSAIDs や *Helicobacter pylori* virusなどによる胃粘膜障害を抑制します。

3. OOH\*\* を殺す、胃炎・胃潰瘍を抑制します(カット-off)。

4. 高活性\*\*\*、特にびらん・出血に優れた効果を示します。

5. 新作用発現率は 69% (43/6,276)でした。主な副作用は、便祕(6件)、GPT上昇(5件)等でした。

\*NSAIDs: non-steroidal anti-inflammatory drugs (非ステロイド性抗炎症薬)

\*\* OOH: Quality of ulcer healing (胃潰瘍治癒度)

\*\*\* 高活性: 急性胃炎・慢性胃炎の効力強度

\*\*\*\* 通常、成人には1回1錠(レバミピドとして100mg)を1日3回、朝、夕及び就寝前に絶食投与する。

下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善

急性胃炎・慢性胃炎の急性増悪期

通常、成人には1回1錠(レバミピドとして100mg)を1日3回絶食投与する。

（使用上の注意） 抗酸  
副作用(まれに): 0.1%未満、ときに: 0.1~5%未満、副腫なし: 5%以上又  
は度不規

(1)過敏症: まれに発疹、蕁麻疹、薬疹様皮疹等の過敏症状があらわれるこ  
とがあるので、このような場合には投与を中止すること。

(2)消化器: 口渴、口炎、また、まれに便祕、腹痛、腹痛、下痢、嘔吐、嘔吐、腹痛、腹痛、嘔  
吐、嘔吐等があらわれることがある。

(3)肝: 肝: まれにGOT、GPT、Y-GTP、AI-PGの上昇等の肝機能障害があ  
らわることがある。

(4)血: 血: まれに白血球減少があらわれることがある。

(5)その他: 乳頭動脈、乳汁分泌誘発、月経異常、めまい、また、まれにBUN  
上昇、浮腫、頭痛、頭部血管破裂等があらわれることがある。

※その他の使用上の注意等は、添付文書をご参照ください。

胃炎・胃潰瘍治療剤 薬価基準収載

**ムコスター錠 100**

レバミピド製剤

大塚製薬株式会社 学術部

東京都千代田区神田司町2-9  
※本邦初の胃潰瘍治療剤

(95.7年度)